



ドクター・ハザマの

# バイタルサイン塾 45

## 薬剤師の職能拡大が内包するピットフォール

ファルメディコ株式会社  
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座  
医師・医学博士 狭間 研至

### 薬学的専門性の発揮による職能拡大 しかしそこに思わぬ落とし穴が…

薬剤師にとってのバイタルサインはあくまでもツールであり、その目的は、患者さんの薬物療法の適正化、地域医療の質的向上であるということは、本連載でも何度か触れてきました。

フィジカルアセスメントも、それを行うことが目的ではなく、薬学的専門性に基づいて患者さんの状態や前回処方の効果を読み解くことで、次回処方の内容が、より患者さんの状態にマッチしたものへと変貌していくことが目的であり、それらを追求していくなかで、結果的に薬剤師はフィジカルアセスメントを行うようになると思ってきました。

バイタルサインの活用や、薬学的専門性に基づくフィジカルアセスメントの実施によって薬物治療の質が向上し、その治療成績がさらに良いものになれば、結果として薬剤師の職能は拡大していくのだと思います。

この手段か目的か、また、目的か結果かということについては、この数年、私自身も考えてきましたし、時に取り違えそうになることもありましたが、最近ではかなり明確に区別し、理解できるようになってきました。しかし、そこには思わぬ落とし穴（ピットフォール）があることに気がついたのです。

### 「時間がない」という問題を解決する機械化は 薬剤師にとって脅威か福音か

薬剤師の在宅業務や、様々な臨床現場でのバイタルサイン、フィジカルアセスメントの活用は、国の掛け声や、それに呼応するような薬剤師会をはじめとする各種業界団体のテコ入れにもかかわらず、なかなか前に進みづらいことがあります。

その原因は様々考えられますが、実は最大の課題は、今でも十分すぎるほど忙しい薬剤師が、新しい業務に

取り組むだけの時間的余裕がないということではないかと思うようになったのです。

忙しい原因の一つは、人材不足です。ご存じのように、薬剤師不足は医療専門職の中でも深刻で、なかなか新しい人材が潤沢に集まる環境ではありませんし、その状況は当分の間改善しないのではないかと感じられます。よって、薬剤師の在宅参画や、ベッドサイドでのより臨床的な活動は、「今後、人材不足が解消してから」という条件付きでペンディングされているのではないかと思います。

一方、いわゆる調剤業務での機械化は急速に進んでいます。今や、抗がん剤のミキシングや、散剤の調整も機械が行う時代がやってきました。薬剤師が行っていた仕事が、どんどん機械にとって変わられるというふうに捉えるならば、昨今の流れは脅威として受け止められるだろうと思います。

しかし、忙しくて新しい業務に取り組む時間がないと悩んでいた薬剤師にとっては、実は願ってもない素晴らしいニュースに聞こえるのではないかと思います。お薬をカウントする、ピックアップするという作業は、その行為そのものに薬学的専門性はそれほど必要ではない可能性があるのではないのでしょうか？ 調剤作業を部分的に機械に任せてしまうことで、薬剤師は新たな活動の時間を手に入れることができ、その時間を、以前から興味もあり取り組んでみたかった在宅の業務に活かしていくことができるのではないかと思います。どんな物事にも二面的な見方がありますが、調剤業務の機械化はまさにそのことだと思えます。

切符の自動販売機や自動改札は、京都のオムロンという会社が今から40年以上前に作ったものですが、その創業者の立石一真さんはこんなことをおっしゃっていたそうです。「単純作業は機械にやらせて、人間はもっと創造的な作業をすべきである」——今、薬剤師業務に押し寄せている機械化の波は、このような観点で捉えるべきではないのでしょうか。